

改めて保育の原点としての仏教保育を考える 「死 を見すえた生命尊重教育」の必要性について

著者	佐藤 達全
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	26
ページ	287-318
発行年	2021-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000898



改めて保育の原点としての仏教保育を考える

——「死を見すえた生命尊重教育」の必要性について——

佐藤 達全

1、はじめに（なぜ改めて仏教保育なのか）

いつ誰が言ったのかは寡聞にして知る由もないが、「人の命は地球よりも重い」と言われてきた。たしかに、誰の命も一つしかない（掛け替えのない）ものであるだけでなく、その終わりがいつやってくるのかは本人にも予測できないし、ひとたび死んだら二度とこの世に戻ってくることはできないのであるから、命を大事にする（今という時を精一杯に生きる）ことに最大限の努力を傾注しなくてはならないことは明白である。冒頭の言葉は、そうした命の実体を示しているであろう。

ところが、昨今の世相に目を向けると、そのような言葉で形容されるべき「掛け替えのない命」が、いとも簡単に傷つけられたり奪われたりしている現実を嫌というほど見せつけられるのではないだろうか。私たちが「命の本当の姿」を直視したならば、どのような状況であっても「命を大切にすゝ死なないようにすゝ」ことを最優先にしなく

てはならないはずである。

それにもかかわらず、自分の命を意図的に死に向かわしめたり他人の命を理不尽に奪ったりする事件が後を絶たないのである。具体的な事例は毎日のようにテレビや新聞によって報道されているのでここでは取り上げないが、個々の事例の背後には、現代社会における「命に対する認識の誤り」が存在しているのではないだろうか。それは、私たちが「生きていることに内在している死を見失ってしまった」という重大な誤りのことである。

筆者がこうした問題に関心を持つようになったのは、都市化や核家族化が進むにつれて出産や臨終が家庭から離れた世界のできごと（他人ごと）に変わってしまったこと、そして、それから20年ほど遅れて、命を傷ついたり奪ったりする事件が増加してきたように感じたからである。昭和30年代頃までの日本は農業が中心で、出産や臨終の多くは家庭内におけるできごと（自分自身のこと）であった。また、身近に家畜が飼育されていたことから、多くの子どもがその生死を目にしたり、田畑や庭で植物の発芽生長や枯死を目にしたりすることができた。ところが、その後の高度経済成長と共に都市化や核家族化が急速に進み、そのような環境も大きく変わってしまったことは周知の通りである。そのことが人の心にとどのような変化をもたらしたのかについて、『禅の友』に掲載された筆者の「いのちの姿を見つめる……私の宗教教育論……」を紹介しておこう。¹⁾

〈「いのち」の姿を見つめる ……私の宗教教育論……〉

一 見えにくくなった生命

今は「人の生命が見えにくくなった」と言われることがあります。たとえば、赤ちゃんはほとんど病院で生まれ、寝たきりの状態になった人の多くが、病院のベッドで最期をみとられます。これも、そうしたことにつながるのでしょうか。

私が子どものころは、どこの家でも助産婦さんの助けを借りて家で出産しました。庭で遊んでいた私は、「オギャア、オギャア」という泣き声を聞いて急いで家の中にとびこんでゆきました。母の寝ているふとんのそばに座って、赤くてしわくちやの「妹」を不思議そうに見ていたことを今でも覚えています。

八十歳を過ぎて床につくことが多くなった祖母を、家族みんなでお世話しました。食事を運んで行ったり、身体を拭いたりしながら、人が齢をとっていく姿を毎日の生活の中で見ることができたのです。祖母は「ありがたい」と言いながら、私にいろいろな話をしてくれました。

二 誕生も別れも感動的

現在では、人の誕生や死は、病院という限られた世界でのことになったのです。農業が中心だった日本が工業化し、農村から多くの人が都会へ移動していきました。核家族化が進み、共働き家庭が多くなりましたから、以前のような形での出産や最期の看取りは難しいでしょう。

家の中から出産や老いや臨終の場面が消えたことは、子どもの目からも「生命の始まりと終わり」が見えにくくなったことを意味しています。

赤ちゃんの誕生は、きわめて感動的なできごとです。パパやママにとってはもちろんですが、新米の「お兄ちゃん」や「お姉ちゃん」にとっても、うれしそうなママの表情は忘れられないでしょう。

生まれたばかりの赤ちゃんは、食べることも排泄することも、すべてまわりの人の助けが必要です。パパやママもぎこちない手つきでお風呂に入れたり、おむつを替えたりしています。新米お兄ちゃんは、ちよっぴりやきもちを焼きながら、そんなようすをながめています。

反対に、老いていく人の姿を見るのは寂しいことです。いくら天寿をまっとうしたからといって、肉親との別れが辛くないはずはありません。けれども、別れを悲しんでいるパパやママの姿も子どもの心に何かを強く語り

かけているのです。

三 効率優先の社会

ところが、工業化した社会では、そんな悠長なことを言っではいられません。より早く、より大量に生産しなくては競争に負けてしまうからです。そのために現代は、よく働く二十代から五十代の人を中心とする見方が広がっているでしょう。

けれども、人を働けるかどうかで評価することには賛成できません。それは、赤ちゃんであつても高齢者であつても、生命の重さに変わりはないからです。

赤ちゃんが誕生することを「生まれる」と言います。これは文法的に説明すると、「受け身」の表現です。つまり「生んでもらった」のです。自分の意思でこの世に出てきた人は一人もいません。

その生命の始まりは精子と卵子が受精した、たった一つの受精卵です。女性の体内で作られる卵子には七百万個の子備軍がありますが、一生のうちで卵子として成熟できるのは、そのうちの四〜五百個にすぎないそうです。一方、卵子にたどりつくことができる精子は一度に放出される二億から三億のうち、たった一つしかありません。ですから、「わたし」という人間がこの世に誕生する可能性は、何兆分の一という小さなものです。

お釈迦さまが「天上天下唯我独尊」とおっしゃったのは、生命がいかにかけがえないものであるかを私たちに気づかせようとしたからでしょう。

四 生かされている生命

かけがえない生命も、永遠に生きることできません。「自分の生命」と思っていますますが、終わりの日さえ知ることができないのです。老いることも病むことも、死ぬことも、自分の思いどおりにはなりません。このように考えると、自分の力で「生きている」のではなく、「生かされている」と考えざるを得なくなります。

赤ちゃんの身体はどうして大きくなるのでしょうか。どうして大人になると成長がとまるのでしょうか。どうして人は老いるのでしょうか。医学や生命科学はめざましい進歩を遂げましたが、私たちの生命はわからないことばかりです。それほど、生命の仕組みは複雑で奥が深いのです。

生老病死は、人間の自然な姿です。お釈迦さまが出家を決意されたのも、その問題と向きあうためでした。

赤ちゃんや高齢者のお世話をすることによって、子どもは生命の不思議さと向きあうことができます。毎日の生活の中に、子どもの宗教教育の手掛かりはいくらでもあるのです。それが、生命を大切にすることにつながるのではないのでしょうか。

人の誕生や死という「厳粛なできごと」が、家族の生活の拠点である家から離れて病院や施設に移ることは近代化に伴う必然であるかもしれないが、それが子どもの心に大きな変化をもたらしたことを忘れてはならない。そして、個人差はあるにしても、それが幼児期から十年後、二十年後に「生命観」として明確な結果を結ぶのではないだろうか。先に「20年ほど遅れて」と書いたのはその意味である。

ただ、出産や臨終が家庭内で行われなくなることが「近代化に伴った必然」であったとしても、それを補完する方法はなかったのだろうか。「子どもが死をどのように認識するか」の研究を行っている井柳基名・大城綾子・千葉武夫・石垣恵美子らは、

「幼児期の特性から、抽象的な話や絵本などを通しての認識よりも身近な生活の中での体験の影響が大きいのであるから、幼児の身の回りから直接的な死を大人は故意に遠ざけるべきではないと推論できる」「幼児期の宗教教育は、具体的・体験的でなければならず、〈死の教育〉もまた、具体性をもたなければ成功しない。死をいたずらにタブー視し

て、幼児から死をことさらに回避しようとするべきでない」

と結論づけている。⁽²⁾

その指摘のとおり、命の大切さは「知識として教える」ことだけでは、その本質に迫ることが難しいもので、日々の生活体験において「自分自身で気づいたり感じたりすること」に大きな意味があると筆者は考えている。

問題は、都市化や核家族化した現状を踏まえた上で、子どもがそうした体験をすることのできる機会をいかにして設けるかということではないだろうか。

その意味で、命を大切にする心を育てることは学校教育においても重要な課題であるはずなのだが、それも十分ではなかったと言わざるを得ない。そのことに関して筆者は以前、そこに大きな問題があったことを指摘した。というのは、以前の学習指導要領では、「死から目をそらせた生命尊重教育」が行われていたと思われるからである。こうした現状について筆者は「死を忌避する傾向と生命尊重教育」と題して次のように指摘したことがある。⁽³⁾

すでに述べたように、子供たちを取り巻く状況が大きく変化した現代社会では、「いのちを大切にする心」を育てることは容易ではない。しかも、学校教育で「死」を取り上げることには「育ち盛りの子どもに死なんて縁起でもない」と考える傾向が強い。このことは、昭和二二年の「学習指導要領試案」から昭和五二年の改訂版まで、小・中・高等学校のすべての学習指導要領とその解説書に「死」という言葉が登場してないことに端的に表れているであろう。

このことに関しては、得丸定子氏らの研究グループも「いのち教育」の現状について、

小学校では全国的に生活科等で、生命の誕生、福祉教育、動物を飼育することによる命の営みという視点からアプローチはなされているが、〈死〉と真正面から取り組むことにまでは至っていない。

と指摘している。⁽⁴⁾

2、死を意識した保育の必要性

こうした指摘も踏まえて筆者は、さらに上掲の「教育（保育）の根底としての仏教保育について」の中で、

けれども、この世に誕生したすべての生命は必ず死ぬのであるから、死から目をそらしたままでは生命の本当の姿を理解することはできないはずである。そのことに気づいたからかどうかは定かでないが、平成元年に告示された「小学校学習指導要領・生活」の解説書には「動植物の病死や枯死という冷厳な事実には遭遇することがあるが、それらを大切に扱い動植物が生命を持つていることを一層強く実感したり、病死や枯死させたりしないようにするためにはどうしたらよいかを考える機会にすることが大切である」という表現が初めて用いられた。

そして、平成一四年度から実施された「小学校学習指導要領」では小学四年生の理科の「内容の扱い」の項で「植物の個体の死について触れること」に言及されている。植物ではあるものの、それまでは「生」の方向から取り上げるだけであったものが初めて「死」という言葉を用いて指導するという大きな転換がなされたのである。

さらに、「道徳編」では、「人間の誕生の喜びや死の重さ、生きていくことの尊さを知ることから、自他の生命を尊重し力強く生きぬこうとする心を育てるとともに、生命に対する畏敬の念を育てることが大切である」と、「人

問の死」が明記されている。

と述べて、このような学習指導要領の記述の変化は、「生だけに目を向けた生命尊重教育」が限界に來ていることを意味していると結論つけた。⁵⁾

同様の考えは、医師で日本女子大学家政学部児童学科の教授であった中村博志も指摘している。中村は「昔の何世代も同居する大家族であれば、〈死〉というものはその生活のなかで自然に体得されてきたものです」と述べて、動物園で育って出産したチンパンジーは自然の群れのなかで生活して出産を見ることができないため、育児のしかたがわからないので飼育係が育児の代役をするという興味深い事例を紹介している。⁶⁾

また、中村は「ヒトが死んでも生きかえる（生きかえることもある）と考える子どもたちが増えている」という衝撃的な調査結果を発表しているので紹介しておこう。中村は次のように述べている。⁷⁾

最近の子供たちは、死についてどんな考えを持っていると思いますか？

いまから十年ほどまえのことになりますが、金子政雄先生の論文を拝見しました。この論文によると、小学校六年生の約三百人に対して（一九九九）「一度死んだ生きものが生きかえることかあると思うか」という質問に、なんと四分の一が「生きかえる」、さらに四分の一が「生きかえることもある」と回答していたのです。

最初はほんとうかなとも思いました。しかし、その後、私も同様な調査を実施してみたところ、二〇〇〇年におこなった都内小学校二校の高学年、約四〇〇名の調査では約三分の一が「生きかえる」、三分の一が「生きかえることもある」と回答しております。「生きかえらない」と答えたものは約三分の一に過ぎませんでした。

つぎに、中学生の四〇〇名以上の調査をしてみました。中学生になればおそらくこの比率はかなり少なくなっ

ていると予想したからです。この結果は恐るべき結果でした。なんと中学生になっても「生きかえる」ないし、「生きかえることがある」にチェックを入れたものが約半数もいるではありませんか！

さらに、中村は「死んでも生きかえる」と思っている女子大生や歯学部（歯学部）の学生がいるという、にわかには信じがたい事例を紹介した上で、「現代の子供たちがひき起こす多くの残忍な事件の背景には、〈子供たちのまわりから死が遠ざけられている〉ということがひとつの原因になっているのではないかとこの仮説を持つにいたしました」と、看過できない見解を示している。⁸⁾

ここで紹介したショックな事例から、筆者は現代の日本では、相当数の子どもたちが、生の最終場面として不可避な「死」が存在することを意識しないで生活しているのではないかと考えるようになった。その結果、他人の命を傷つけたり奪ったりする事件が頻発するだけでなく、自分の命さえも大切にしないで漫然と生きている学生が多くなってしまったのではないだろうか。

3、死から目をそらせた現代社会

そこで、次に紹介するのは筆者が接している保育科に在籍する学生の生命観である。筆者が保育科の短大に勤務するようになって40年が経過したが、全国的な高校生の短大離れ（四年制大学志向の高まり）の中で、短大生の学力低下（4大生も同様といわれるがここではふれない）が顕著になっていくだけでなく、目を覆いたくなるほどの学習意欲の低下（保育者として就職したいがそのために必要な知識や技能の習得に努力しない）努力が必要とは考えているものの努力を継続することができない学生が半数以上という現実）が見られるようになってしまった。

特に、筆者が勤務している保育科では、卒業生の大半が乳幼児の保育に従事するのであるが、このままでは乳幼児

の命を預かる保育の専門家として問題が発生するのではないかと危惧するほどの状況である。そこで筆者は、学生が自分の目指す職業で求められる基礎的な知識や技能の習得に前向きに取り組むように、さらにはかけがえのない乳幼児の命を預かる保育者としての責任感を育んでほしいと考えて、10年ほど前から担当する授業（保育実習指導・国語表現法・倫理学）の第1回目に授業内容と関連づけながら「命についての話（人としてこの世に生まれることの難しさ＝受精の確率の低さ、受精卵から誕生までの神秘的なプロセス、生まれた命の儚さ、誰の命も比べて序列がつけられないほど尊いものという認識が必要なこと＝個性のすばらしさ）」を行ってきたので、その概略を紹介しておこう。

【第1回目の授業で実施している命の話を概略】

- ①精子と卵子が受精してヒトが誕生するのは700兆分の1という限りなくゼロに近い確率であること。
- ②たった一つの細胞（受精卵）が、約10か月で60兆に分裂してヒトの身体や心の働きが形成されて赤ちゃんが誕生するプロセスがどれほど神秘的であるかということ。
- ③誰の命も「オンリーワン」であって、比べて序列がつけられないものであること。
- ④それほど尊い命であっても必ず〈終わりの日〉が訪れること。しかも、その日を自分で決めることも前もって知ることもしないこと。
- ⑤ひとたび死んだら二度とこの世に戻ってくることはできないこと。
- ⑥自分の命だからといっても自分一人で生きることができず、自分以外のヒトや動物や植物の力を借りなければ生きられないものであること。

以上のような内容について、中学校の理科や保健で学習する程度の内容を60分ほどかけて丁寧に説明した後で、出

席カード（200字程度）に考えたことや意見を書いてもらっている（筆者が勤務する短大に入学する学生の3分の2以上が、偏差値30台から50未満とされる高校の卒業生であるため、中学校までに学習したはずの内容もしっかりとは覚えていないことを前提にして授業を進める必要がある）。

こうした方法を行うようになって10年ほどが経過したが、毎年の出席カードからは、授業を行う上で考慮しなければならぬと思われる学生の「命に対する認識」の問題点（その問題は物理的に命を傷つけたり奪ったりすることに止まらず、自分に与えられている〈時間〉を無為に過ごすことも含まれる）が多数見つかるので、代表的な感想をいくつか紹介しておこう。

- ① 私はこれまで、命について考えたことがありませんでした。ですから先生の話を聞いてびっくりしました。
- ② 私は今まで、生まれてきて当たり前だと思っていて、当たり前のように生活してきましたが、先生の話を聞いてその考えが間違っていたと気づきました。
- ③ この世に生まれてきて、死んだ方がいい人も生きていてはいけない人も存在しないことに気がついたので、生きていることに感謝し、誇りを持ち自信を持つことが大切だと思います。
- ④ 保育者を目指す私は、もつと真剣に勉強しなくてはいけないと思いました。
- ⑤ 自分は他の誰でもない世界中でオンリーワンの存在であること、そして誰もが他の誰でもないたった一人しかいない存在。それを誇りに思うべきです。自分でいることが嫌になって、あんな人になりたいと思うこともあるけれど、自分のよいところを見つけて自分でいることに自信を持ちたいです。

学生が書いた感想の一部を紹介したが、ほとんどの学生が共通して書いていたことは、「これまで命や死について考

えたことがほとんどなかった」ということである。このような調査からも、「物理的に生命を傷つけない」という生命尊重教育だけでなく「終わりがくるまでの時間を無駄にしないように生きる」といった「究極の生命尊重教育」の必要なことが納得できるのではないだろうか。学生の感想を続けよう。

- ① これまで命について本気で考える機会がほとんどなかった。
- ② この世に人として生まれる確率が小さいことに驚いて感動した。
- ③ これまでは、この世に生きていることが当たり前だと思っていた。
- ④ 命の大切さに気づいた。
- ⑤ 自分の命が一つしかないことを知って考えさせられた。
- ⑥ 命に終わりがあることに気がついた。
- ⑦ いつ命の終わりが来るかわからないのだから、一日一日を大切にしようと思った。
- ⑧ 自分を生んでくれた両親に感謝しようと思った。
- ⑨ 保育者になったら子どもの命をしっかり守ろうと思った。
- ⑩ 子どもにも命の大切さを伝えようと思った。

4、幼児期からの生命尊重教育

このようなことについてはこれまでも種々の発表を行ってきたのでこれ以上は触れないが、このような状況を見るにつけ、筆者は幼児期から「生命を尊重する心を育てるための教育」が必要との思いを強くするだけでなく、へいのちを大切にすることを育むところが仏教保育の役割ではないかと確信するようになった。その理由は、仏教の「諸

行無常」や「諸法無我」といった生命観は現代科学の生命観と一致した極めて科学的な考えであるうえに、「この世に生まれた命は必ず死ぬ」ことを大前提にした仏教の生命観（人間観）こそが〈いのち〉を大切にすることを最も適と考えるからである。

しかも、「天上天下唯我独尊」で示されるように「誰の命も他に代わることができない尊いもの」であり「自分の命は自分以外の多くの命と生かしあっている」ことを基本原理としていることは、与えられた〈いのち〉を精一杯生きようとする道徳理念にもつながると考えるからである。

いま、私たちが行わなくてはならないのは「死を見すえた生命尊重教育」であり、「自分以外の命と共存した生き方」を身につけることなのである。それゆえに、筆者は、保育者を目指す学生に「人として生まれることの有り難さ」「生命のかけがえのなさ」「生命の終わりがいつ来るのかは自分でもわからないこと」「自分の生命が自分以外の多くの生命と関わりあって生きていること」等について学んだ上で乳幼児の生命と向きあってほしいと考えている。そのことについて「保育者を目指す学生に対する生命尊重教育の必要性について」と題する論文で、次のように述べたことがある。⁹⁾

自他の生命を傷ついたり奪ったりしてはいけないということは、だれでも考えることである。けれども、これは大切なことではあるものの「消極的な生命尊重」であり、この段階に留まるのではなく「積極的な生命尊重」に進まなくてはならないであろう。それは、「今日」という一日をどのように生きるかという問題であるが、精一杯に生きる（勉強であれ、仕事であれ、なすべきことに全力で取り組む）ことが「生命を大切にすることである」という認識はあまり見られないように感じられる。（中略）

このような視点が、乳幼児を保育する保育者にとって非常に重要だと筆者は考えている。それは、保育の目的

が乳幼児の生命を保護するだけでなく、その可能性の芽を最大限に伸ばすことからである。上述したように、生命尊重をこのように捉えることは、これまではあまり見られなかった。しかし、「生命」の本質について考えればこのような見方が必要なことはすぐに納得できるのではないだろうか。

保育という営みは、子どもの身体的な面での「生命」を保護するだけでなく、子どもの中に潜んでいる「可能性」の芽を十分に伸ばすこともある。

幼児教育や保育の方向性を示した「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」には、そのことについて次のように示されている。

「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第二十二条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」(幼稚園教育要領…第一章 総則)

「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない」(保育所保育指針…保育の原理)

このように、乳幼児期は長い人生の基礎作りをする非常に重要な時期として位置づけられている。しかも、この時期の子どもは周囲のひとの行為や生き方から受ける影響がきわめて大きい。そのため、保育者は子どもの「成長のモデル」としての立場を自覚して、まず、みずからの「生き方」と向きあって、「生命」を尊重しなくてはならない立場なのである。

5、生命尊重の視点

そして、筆者が提案したのは「生命を尊重することの三つの視点」である。

- (1) 他者の生命を傷ついたり奪ったりしないという視点
 - (2) 自分の生命を傷ついたり死に至らしめたりしないという視点
 - (3) 動物や植物の生命を傷ついたり奪ったりしないという視点
- ただ、これらはきわめて一般的な生命尊重の視点であるが、いずれも「消極的な観点」だと藤武（ふじたけし…滋賀大学教授）が指摘している。¹⁰⁾

藤の言うように、他者の生命や自己の生命を傷ついたり奪ったりしないことは重要なことではあるが、筆者もそれだけでは本当に生命を尊重しているとは言いきれないと考えている。それでは「積極的な生命尊重」とはどのようなものなのか。

それは、私たちは誰でも深い「縁」があつてこの世に生を授かつたのであるから、その命を「最高に輝かせて生きようとする姿勢」である。それが「積極的な生命尊重」という視点で、次の二つである。

- (1) 自己の特性を最高に発揮しようという視点
 - (2) 子どもの可能性を十分に伸ばそうという視点
- なお、積極的な生命尊重の詳細については別に述べたので、拙稿を参照してほしい。¹¹⁾

6、子どもは体験から「いのち」の本質を知る

このように見てくると、「死（生のはかなさ）」や「命の尊さ（掛け替えのなさ）」を本当に実感するためには、知識と

して「教える」だけでは不十分で、「ヒトの誕生や死」を身近に体験したり動物を飼育したり植物(作物)を育てたりする体験が大きな意味を持っていることに気づくのではないだろうか。実際に幼児期の教育は単なる知識を「教える」のではなく、「幼児が遊びを通してみずから感じたり気づいたりすることを基本にしている」(このことは、幼児期の教育・保育の基本が示されている「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」を見れば明らかである)のはそのためである。

そこで、筆者が実践していることを紹介した「野菜の栽培で〈いのち〉を学ぶ」の一部を紹介してみよう。⁽¹²⁾

私は境内の一角にある畑や竹やぶで、子どもたちと芋掘りやタケノコ掘りをしています。その時の子ども目の輝きは、園庭で遊んでいる時とは異なっているのです。そして、大型連休が終わる頃、畑にキュウリやナス、ミニトマトやピーマンなどの苗を植えます。夏が近づく頃には、大きく育って花を咲かせます。「先生、花が咲いたよ」と知らせしてくれる子どもたちの声が高ぶっています。

ナスの花は紫色をしていますし、キュウリの花は黄色です。ミニトマトも黄色ですが、花の形が違います。ピーマンの花は白です。野菜によって花の色や形が異なること、一本のナスやミニトマトでも一斉に花が咲くのではなく、茎の下の方からだんだんと咲いていくことなど、子どもは〈いのち〉のいろいろな姿を学んでいます。街の中で畑がない園では、プランターで野菜を育てていました。ある時、その園の園長先生が「週末に水やりを忘れていたため、苗が枯れてしまい、子どもたちが悲しそうでした」と話していました。

毎日のように畑に来ている子どもたちは、細かなところまで実によく見えています。子どもの観察力の鋭さには、驚かされることばかりです。そして、先生に一つ一つ報告してくれます。子どもの好奇心は旺盛ですから、子どもの言葉や気持ちにしっかりと応えることが〈いのち〉に対する関心を深めることにつながるでしょう。それが仏教保育の基本につながるのではないのでしょうか。

野菜の栽培に関しては、より感動的なもう一つのできごとを紹介しないわけにはいかない。それは、学生が実習させていただいた保育園でのことである。¹³⁾

毎年のことですが、収穫の時期が近づくと、子どもたちの目が輝き始めます。ミニトマトが少しずつづいてきた頃、年長組の子どもたちが「先生、いつ採るの」と聞いてきました。先生は、ほかのクラスの先生と相談して採る日を決めました。

子どもたちは毎日、カレンダーを見ながら「その日」を楽しみにしていたそうです。お帰りのとき、クラスのみんながくちぐちに「先生、あしただよね」と、うきうきしたようすでした。トマトを採る日、子どもたちはわくわくした表情で、畑に行きました。

ところが、「さあ採りましょう」と先生が言っても、だれひとり採ろうとしないのです。不思議に思った先生が「どうしたの」と聞いたところ、一人の子が「だって、かわいそうなもの」と答えたそうです。その言葉を聞いた先生の目には涙が浮かんでいました。毎日、お世話をしているうちに、子どもたちの心にやさしい気持ちがあげられてきたのでしょうか。

野菜の栽培だけでなく、ドジョウやメダカやザリガニを飼っている園やウサギを飼育している園も少なくない。小動物と言っても、飼育にはそれなりの大変さが伴うが、それを差し引いても、都市化された現代社会では、子どもたちが「命を実感し、命のはかなさや別れの辛さを体験できる貴重な機会」と考えられる。

筆者は以前「生かせ生命の保育」というテーマで、小動物の生と死について次のように書いたことがある。¹⁴⁾

カブトムシやザリガニの場合と違って、ウサギやニワトリのように少し大きな生きものでは、その表情や鳴き声や動きから子どもたちはそれらの生きものの気持ちをおしはかろうとする。ウサギもそっと抱いたりしたときに、身体の内ぐもりや心臓の鼓動から、生きていることを強く感じることができようであろう。これも貴重な体験である。

また、生きものは糞をすることやウサギとニワトリでは糞の形が違っていても自然にわかってくる。卵からかわいらしいヒヨコが誕生し、成長するにつれて鳴き声が変わること、メスとオスでは形や体の大きさまで違うことにも気づくであろう。魚のようだったオタマジャクシに、足や手が出てきてカエルになることも驚きであろう。

このように、多くの感動を与えたりさまざまなことに気づかせてくれたりすることから、生きものを飼育することの意義は大きい。しかし、生命あるものを飼育することにはそれなりの配慮が必要になる。生あるものは必ず死ぬのはあるが、だからといって不注意からその生を縮めていいわけではない。それは、どんな生きものもたった1つしかない「いのち」を生きているからである。

ところが、どんなに気をつけていても、飼育していた虫や小動物が死んでしまうことがある。昨日までもぞもぞと動いていたカブトムシが、今朝はびくりともしない。オタマジャクシが白いおなかを上に向けて水槽に浮かんでいる。登園してきた子どもたちがそれに気づいて騒いでいる。ショックングなできごとである。大切に世話してきた生きものとの別れの時である。そんなときには、どうしたらよいだろうか。

ましてそれが、ウサギやニワトリなどのように、多少なりとも子どもたちと心を通わせることのできた生きもの場合は、悲しみもひとしおであろう。冷たくなってしまったウサギを抱いたまま離そうとしない子どももい

る。死んだウサギはもう以前のようにはエサを食べたり走り回ったりしないことを、どのようにして納得させたらよいだろうか。

そのためには、別れの儀式が必要であろう。それまでのつながりが強ければ強いほど、心をこめて行うべきである。お墓を作ったり「さようなら」の言葉を言ったりすることで、子どもたちの心に死を受け入れるゆとりができてくるだろう。そして、生あるものには必ず死があることを、子どもたちの心に伝えていかななくてはならない。それと同時に、別れの悲しさやつらさを乗り越えて、生きていくことの大切さも伝えなくてはならないのである。

先に紹介したように、家庭から誕生や死が遠ざかり、学校教育においても「成長期の子どもの教育に、死のことを取り上げるなんて縁起でもない」として敬遠されてきた状況を鑑みると、「生まれた命は必ず死ぬことを前提にして、その日が来るまでを精一杯に生きよう」と教える仏教の生命観を学ぶことが、生命尊重の心を育むために大きな意味を持つていることが理解できるであろう。

そして、生命尊重の心を育むことは、自分や他人の生命を傷つけたり奪ったりしないことにとどまらず、一日一日を精一杯生きることにもつながっているのである。それゆえ、筆者は「自他の生命を尊重する心を育む」ことを目的とした仏教保育こそ、あらゆる幼児期の教育の基本として重要な意味を持つていると考えるのである。

7、仏教と保育は異質なもののか

そこで、ここからは現代に仏教保育が果たすべき役割について考えてみたいのであるが、そこには大きな問題が存在する。それは、宗教としての仏教と幼児教育としての保育が結びつくのかという問題である。このことに関連して、

立命館大学の山内清郎（教育人間学・准教授）が「仏教と保育という異質な言葉が出会う場所」という論文で、ある仏教園の保護者向けのパンフレットに関して次のように述べている。まず、パンフレットを紹介しておこう。

恵まれた環境にある当園は、『肌で自然を・心で仏を』感じ、いきいきとした人間形成を養うことを大きな目標としています。自然とのふれあいの中から命の大切さや文化を学び、仏教保育を通して人や物を思いやる気持ちを育てます。

ここからが山内の考えである。山内は、

「仏教保育」？これはよかれあしかれ、かなり目を引く語句である。仏教も保育も、それぞれ言葉としては、それなりに日常語として使うこともあり珍しくない言葉である。ただし、普通に生活しているだけでは、まず目にする事のない「仏教保育」という合成語を目の当たりにし、再度視線をパンフレットの右の方に向けて、「主な年間行事」の中に、入園式、七夕まつり、お泊まり保育、サツマイモ掘り、クリスマス会、等のいかにも幼稚園・保育園にありそうな行事の合間に、花まつり、開山忌、成道会、涅槃会、等の行事も記されていて、このパンフレットが紹介・案内するのが仏教保育の園であることが改めて実感されるのである。

多くのひとつとして、仏教保育というものとの出会いは、このような感じになるのではないだろうか。

と述べている。¹⁵⁾

山内は仏教と保育の関連を考えるために、自身が勤務する近畿圏内にある日本仏教保育協会に加盟する82園に園の

教育理念や精神を示した要覧や入園案内書等を送ってもらうように依頼したが、送られてきたのは13園に過ぎなかったという。そして、その中で明確に保育目標を「み仏の子として、強く・明るく・正しく伸びる」としたうえで、基本の柱として「仏様に親しみ、命の尊さと、生きる喜びを感じとる（生命尊重）」ことを明示し、望ましい子どもの姿として「仏様を中心にして生活し、いつでも誰にでも感謝できる子ども」のように明確に取り入れていたのは一園だけであったと述べている。

もちろん、山内は園の要覧や入園案内等には「宗教的環境」「宗教的雰囲気」「仏教精神」「宗教的な道德観」といった言葉は多く用いられていたと述べていて、仏教の教えが保育活動に取り入れられていることは認めているものの、「宗教教育が必ずしも根づいているとは言えない現代日本の教育風土においては、たとえ私立の幼稚園・保育園といえども、宗派性・宗教教義を前面に打ち出すことには、園の側にも、そして保護者の側にも抵抗感が大きい」として、仏教性を前面に押し出すことの困難さを指摘している。

筆者もそうしたことは感じていたので、そもそも仏教保育とはどのような保育と考えられているのか手元の資料を調べてみた。まずは全国で仏教保育を実践している幼稚園や保育園・こども園で組織する「公益社団法人日本仏教保育協会要覧」最新版（平成29・30年度版）を見ると、

「日本仏教保育協会は、仏教に基づいた保育の充実を図り、仏教保育を推進するため、昭和4年に仏教系幼稚園、保育園及び養成機関の全国組織として発足。昭和44年11月15日に文部省（現文部科学省）から社団法人の認可を受けました。さらに、平成24年4月1日からは、内閣府より公益社団法人の認定を受け、活動を続ける最も歴史の長い保育団体です」

と説明されているものの、仏教保育がどのような保育なのかについての説明はない。

要覧には「いかせいのち」を基本方針として生命尊重の保育の実践と心の教育の推進を目指した、次のような保育綱領が定められている。

慈心不殺（じしんふせつ…生命尊重の保育を行おう）

仏道成就（ぶつどうじょうじゆ…正しきを見てたえず進む保育を行おう）

正業精進（しょうぎょうしょうじん…よき社会人をつくる保育を行おう）

この綱領から、言わんとすることは伝わってくるのであるが、明確な定義は示されていない。⁽¹⁶⁾

8、定義のない？「仏教保育」

そこで、仏教保育がどのような保育であるかについて、これまでに示されているさまざまな見解の中からいくつかを紹介しておこう。

① 仏教保育は、一般的技術的の方面よりも情緒的に、信仰的に重点を置いておるだけでありまして、現代、ともすれば心に潤いを失いがちな幼児の保育に関して、一般の保育の基礎こそ、この保育がなされねばならない。（浄土

真宗本願寺派・熊本教区保育連名編『仏教保育必携』1978年6月）

② 仏教に基づいて、乳幼児の人格の完成をめざして行う保育が仏教保育です。（『月刊仏教保育カリキュラム』1995年6月号）

③ 仏教保育は、仏教という宗教を基盤として、仏教の説く教えを生かした保育ということです。(『月刊仏教保育カリキュラム』1998年8月号)

などを初めとして、多くの説明が行われているが、それを読んでも仏教保育がどのような内容であるかの具体的なイメージは湧いてこないのではないだろうか。

たとえば①の場合、仏教保育が「心の問題」に重きをおいていることはわかるが、仏教保育でなくても心を育てているはずではないか。また、②の場合も、人格の完成は仏教保育でなくても行っている。③では、そもそも「仏教の説く教えを生かした保育」がどのような保育であるのかがわからない。

このような状況の中で、日本仏教保育協会が編集した仏教保育の新しいテキストとして『わかりやすい仏教保育総論』が発行された(チャイルド本社・2004年2月)が、その中で杉原誠四郎(武蔵野大学教授)が仏教保育を次のように定義している。¹⁷⁾

仏教保育とは、広く仏教の原理によって成り立っている保育である。単に一般の保育に仏教保育という特別な保育を付加した保育ではない。広く仏教の原理に立って、「人格の完成」へ導くのが仏教保育である。

「仏教保育の新しいテキスト」に掲載された説明なのだが、これを読んで具体的な保育がイメージできるだろうか。それよりも、同書の「仏教保育の理念」という項における山内昭道(東京家政大学教授)の「仏教保育は人間はどう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送ればよいかを仏教の教えによって実現することである」という説明の方が、仏教保育を具体的にイメージしやすいような気がする。

さらに、意外なことに矢田貝公昭編集代表『改定新版『保育用語辞典』に「仏教保育」の項目があつて、そこでは次のような説明がある。¹⁸⁾

仏教の開祖である釈迦の教えを基に、仏教の精神を理想とし、それを生活態度として実現させていく保育である。仏教は、人が人としてどうあるべきかという人間の自己形成の道を、釈迦が説いたものである。もともとは貧民救済的な性格を持ち、寺院や僧侶を中心に進められてきた。主として「慈悲」「知恵」「恩」などで、子どもを平等な人間の存在として捉え、豊かな人間性を育てることを目的とした保育を重視している。人間形成の基礎を培う乳幼児期に仏心を育て、「慈悲心」と呼ばれる、相手の立場に立って物事を考えられる思いやりの優しい心、自他の差別のない平等・公平に物事を見る目と心を育てることを、仏教保育では実践している。(白鷗大学：五十嵐淳子執筆)。

この説明からも、より具体的に仏教保育の内容が感じ取れるのではないだろうか。

このように、仏教保育という言葉は仏教園の関係者以外にも知られてはいるのであるが、その定義化は行われていない。昨年で協会が設立されて90年を迎えた日本仏教保育協会の要覧にも「仏教保育綱領」や「仏教保育の年間のねらい」や事業については示されているものの、「仏教保育とはなにか」という定義が明確に示されていないことが、仏教保育の説明が多岐にわたっている理由と考えられる。

仏教保育を実践するという共通の理念のもとに、1000以上の幼稚園や保育園・認定こども園が協会を組織してさまざまな活動を展開し、夏期研修会や2年ごとの全国大会を開催して保育者の研修や保育内容の充実を図っているが、加盟園には設立母体としての寺院の宗派が多岐にわたっている。日本仏教保育協会は「通仏教的な保育活動」を

基本としているのだが、いわゆるダブルスタンダードの存在が「仏教保育」の定義づけに影響していることが想像されるのである。

9、仏教保育の定義は必要か

このように考えてくると、仏教保育とはどのような保育なのかを厳密に定義する必要があるのか、それが可能なか、可能ならば宗派性はどうか等、さまざまな問題が存在することがわかる。こうしたことを考える際に、佐藤成道（淑徳大学アジア国際社会福祉研究所リサーチ・フェロー、文京学院大学非常勤講師）が、「日本仏教保育協会の歩み」と題する論文を日本仏教保育協会の機関誌『仏教保育』に令和2年1月号（第69号）から連載（不定期）しているが、その6回目の原稿で「仏教保育という言葉は、近時、通俗に於て、漠然と、俄に使い出されたもので、特に学問上からここに定義しない限り、使用している人々でも判然とはその意味を自覚していないだろうと思われるほど唐突に現れたものである」と指摘して、設立当時の状況について詳細に述べていることが参考になるのではないだろうか。いずれにしても、これまでに仏教保育という言葉について厳密な議論が行われたとは言いがたい。

いずれにしても、山内の指摘からも明らかのように、保育と仏教はもともと「異質」な世界であるが、仏教保育を実践している幼稚園や保育園の関係者は、明確な定義づけを行わないまま、ごく当たり前のように「仏教保育」という言葉を口にして両者を結びつけていると思われる。そのことが、仏教保育がなかなか定着しない原因のように感じられてならないのである。

そのためかどうかは定かでないが、先に紹介した「公益社団法人日本仏教保育協会要覧」最新版（平成29・30年度版）には、加盟園数が幼稚園572、保育園461、認定こども園46、養成機関31で合計1079となっているものの、筆者がこの協会との関わりができた平成7年度版では幼稚園784、保育園620、養成機関40で合計1444であ

った。少子化の流れも影響しているであろうが、20年間で350園以上の減少である。これは、「生命尊重の心を育む」という仏教保育の理念が、なかなか浸透しないからではないだろうか。

その一方で、前掲の『わかりやすい仏教保育総論』に示されている仏教各宗派の保育団体の加盟園数を見ると、天台宗保育連盟100、真言宗豊山派保育連合会10、智山保育連合会50、臨済宗妙心寺派120、浄土宗保育協会430、浄土真宗本願寺派保育連盟1020、社団法人大谷保育協会550、曹洞宗保育連合会410、日蓮宗保育連盟150、となっていて、合計した2940園は日本仏教保育協会の加盟園の3倍近くに⁽²⁰⁾なる。

そこには、どのような理由があるのだろうか。もちろん加盟園の数の違いだけが問題なのではない。筆者は曹洞宗寺院に関わっているだけでなく、父が昭和29年に創設した保育園（創設時は無認可保育園、後に公立に移管したが、昭和54年から民間保育園として運営を続け、平成30年から幼保連携型認定こども園に移行）の運営にも関わっているため、曹洞宗保育連合会の活動（全国・県内）にも職員が参加したり筆者が研修会の講師を務めたりしてきたが、参加者はお世辞にも多いとは言えない状況である。

仏教の生命観を基本とした保育を行うことは、都市化・核家族化して「命の姿」を見失ってしまった日本人が、自他の生命を大切に生きるための基本的な心を育むためのものであるから、仏教的な背景のない幼稚園や保育園においても実践できる保育だと筆者は考えているのだが、現実はお膝元の仏教園においても十分にその意義が理解されているとは言い難い。そこで、ここからは、山内が「仏教と保育という異質な言葉が出会う場所」をどのようにして設定するかについて、筆者が鶴見大学短期大学部で行った授業を紹介して今後の方向性を考えてみることにする。

10、必修科目としての仏教保育の授業への取り組み

筆者は1998年から2015年に定年退職するまで非常勤講師として必修科目の「仏教保育」を担当したが、鶴

見大学短期大学部保育科の学生が一年生の後期で履修する「仏教保育」という授業に対してどのようなイメージを持っていたかについて紹介しておこう。言うまでもなく、鶴見大学は曹洞宗の大本山總持寺を設立母体として運営されているのであるから、保育科の学生も一年生の前期に必修科目として「宗教学」を履修していた。

そこで、筆者は毎年の講義を始める前に仏教やお寺に対して感じていることを自由に記述してもらい、授業を進める参考にしようとしたのであるが、大半の学生が否定的な印象を持っていたことに驚いた記憶がある。その一部を示しておこう。

- ①初めは「仏教なんてやりたくない」と思っていた。すごく嫌でした（その理由は書かれていない）。
- ②授業を受ける前は、保育者になるために仏教を学ぶ必要はないのではないかと思っていました。
- ③仏教が保育に関係があるのか疑問に思っていました。
- ④私は仏教に興味がなく、何も知りませんでした。
- ⑤この授業を受けるまでは、仏教に対し「死のイメージ」がとても強かったのですが、授業を受けてからは逆に「生のイメージ」が出てきました。
- ⑥授業を受けるまでは、「なぜ保育者になりたいか」と思っている人が仏教について学ばなければならないのか」と思っていて、全く興味がわきませんでした。
- ⑦最初に仏教保育といわれたときに、保育とどのような関係があるのかわからなくて、つまらない授業だろうと思っていました。
- ⑧今まで、仏教が保育と関係している意味がわからなくて、なぜ勉強しなければならないのかと思っていました。
- ⑨授業を受けるまでは、何でこの授業を受けなければならないのか、どんな関係があるのだろうかと思っただけで全然興

味がありませんでした。

⑩最初は、宗教ということに多少抵抗感がありました。

「授業の成績には関係がないので自由に思ったことを書いてください」と初めに話しておいたので、200名ほどの学生が思い思いの気持ちを書いていた。そのほとんどは、仏教と保育に関係があるとは考えていないため、授業に取り組もうとする意識も消極的であった。保育科には鶴見大学附属高校の出身者も多く、高校時代から仏教行事を経験している学生も少なくないはずだが、保育との関連について肯定的に受けとめる学生はほとんど見られなかった。

このような状況からの授業開始であるため、筆者が常に心がけていたのは仏教と保育を「いのち」というキーワードで結びつけることであった。その詳細は本研究所紀要第13号で具体的に紹介したので、ここでは15回の授業の展開と、授業後の学生の仏教保育に対する意識の変化を紹介しておこう。¹⁾

授業は100名ほどの学生にマイクを使って行ったため、学生とのやりとりは期待できず、担当者が説明する形であった。15回のテーマを次のように設定して、各授業の終了前の10分ほどでその日の内容をもとにしたレポートを書くことで主体的な取り組みを促した。

- 第1回 保育と仏教をつなぐキーワード「いのち」について説明
- 第2回 お釈迦さまとはどのような人か
- 第3回 お釈迦さまの教え(仏教)とは何か
- 第4回 仏教と保育の関係について
- 第5回 仏教保育の基礎知識
- 第6回 仏教保育がめざすものはなにか

第7回 仏教保育と生命尊重の教え

第8回 仏教保育と子育て支援

第9回 食育と仏教保育

第10回 動物の飼育と仏教保育

第11回 仏教保育の行事

第12回 曹洞宗保育と鶴見大学建学の精神

第13回 仏教保育における望ましい保育者像

第14回 現代社会の諸問題と仏教保育

第15回 全体のふりかえり

という内容で、できるだけ具体的な保育活動やエピソードを交えながら、どの授業でも自分自身の「いのち」と向きあつて考えるように進めることを心がけた。

特に意識したのは、第3回「お釈迦さまの教え」で、お釈迦さまが「いのち」をどのように考えたかについて「天上天下唯我独尊」「諸行無常」「諸法無我」を基本におきながら、

① 私たちの「いのち」の誕生がこの上もなく得がたいこと

② 誰の「いのち」も一つしかないことと、比べて序列がつけられないこと

③ 誰の「いのち」も永遠には生きられないこと

④ 私たちの「いのち」は互いに生かしあっていること

⑤ 第9回では、私たちが自分の「いのち」を維持するために動物や植物の「いのち」を食べなくてはならないこと

等について丁寧な説明を心がけ、不明な点があればいつでも質問できると伝えておいた。質問はあまりなかったが、15回の授業終了時にいつもよりも多めの時間で感想を書いてもらったところ、ほとんどの学生が仏教と保育のつながりを理解したようであった。そのいくつかを紹介する。

①この授業を受けるまでは、仏教保育とは仏教の教えを子どもたちに押しつけるような保育だと思っていましたが、生命の尊さを教える保育だと言うことを学び、すごくよい保育の仕方だと思いました。

②最初は仏教と保育のつながりなど全然わからなかったが、講義を聞いていくうちに「いのち」という大事なテーマが見えてきた。保育をするに当たって、技術的など大切なことはたくさんあると思うが、「いのち」を大切にすることという仏教保育の考えはどんなときでも持ち続けるべき保育の根っこのようなものだと思う。

③最初は宗教ということに多少抵抗がありました。けれども、授業を重ねるごとに、仏教保育は素晴らしいものなのだと感じ、もっと知りたい、深めたいと思うようになりました。命を大切にすること、その命の個性を引き出して伸ばすことの大切さなどいろいろなことがわかり、この授業を受けてよかったですと思いました。

詳細は前掲の紀要を参照していただくことにして、仏教と保育という「異質なもの」であっても、「いのち」というキーワードを用いることによって両者が結びつくだけでなく、保育科学生の感想からも明らかのように、改めて現代社会に必要な生命尊重の心を育むために大きな役割が期待できることを記して本稿の締めくくりとしたい。

注

- (1) 拙稿「いのちの姿を見つめる……私の宗教教育論……」(『禅の友』二〇〇一年二月号…曹洞宗宗務庁発行)
- (2) 井柳基名・大城綾子・千葉武夫・石垣恵美子「子どもに対する『死の教育』に関する研究5」(日本教育学会大会研究発表要項、Vol.47、一九八八年)
- (3) 拙稿「教育(保育)の根底としての仏教保育について」(『日本仏教教育学研究』第二十二号…二〇一四年三月)
- (4) 得丸・米澤・吹山「学校教育における〈いのち〉教育の重要性と取り組みについて」(上越教育大学研究紀要第二十一号…二〇〇一年)
- (5) 拙稿「教育(保育)の根底としての仏教保育について」(『日本仏教教育学研究』第二十二号…二〇一四年三月)
- (6) 中村『死を通して生を考える』(リヨン社…二〇〇六年11ページ)
- (7) 中村(同上書14ページ)
- (8) 中村(同上書10ページ)
- (9) 拙稿「保育者を目指す学生に対する生命尊重教育の必要性について」(『育英短期大学研究紀要』第33号…二〇一六年三月)
- (10) 藤武「仏教の精神と生命尊重の保育の実践」(日本仏教保育協会編『生命尊重の保育とは』P22…すぎき出版社一九八六年)
- (11) 拙稿「保育者を目指す学生に対する生命尊重教育の必要性について」(『育英短期大学研究紀要』第33号…二〇一六年三月)
拙稿「少子化時代の保育者養成と生命尊重教育の必要性……人間学として保育学確立に向けて……」(『育英短期大学研究紀要』第35号…二〇一八年三月)
- (12) 拙稿「野菜の栽培で〈いのち〉を学ぶ」(『月刊仏教保育カリキュラム』日本仏教保育協会発行…二〇一九年八月号)

- (13) 拙稿「野菜の栽培とへいのち」教育」(『月刊仏教保育カリキュラム』日本仏教保育協会発行…二〇一六年八月号)
- (14) 拙稿「生かせ生命の保育」(日本仏教保育協会編『わかりやすい仏教保育総論』チャイルド本社…二〇〇四年二月発行所収)
- (15) 山内「仏教と保育という異質な言葉が出会う場所」(日本仏教教育学会編『仏教的世界の教育論理』法蔵館…二〇一六年二月所収)
- (16) 公益社団法人「日本仏教保育協会要覧 平成29・30年度版」(二〇一八年一月…日本仏教保育協会発行)
- (17) 杉原「教育の目的と仏教保育」(日本仏教保育協会編『わかりやすい仏教保育総論』チャイルド本社…二〇〇四年二月発行所収)
- (18) 矢田貝公昭編集代表『改定新版『保育用語辞典』(一藝社…二〇一九年三月発行)
- (19) 佐藤成道「日仏保の歩み⑥ 戦前編 仏教保育という言葉のはじまり」(『仏教保育』日本仏教保育協会発行…二〇二〇年十二月号…第677号)
- (20) 五島満「仏教保育の基礎知識」(日本仏教保育協会編『わかりやすい仏教保育総論』チャイルド本社…二〇〇四年二月発行所収)
- (21) 拙稿「仏教保育に対する保育科学生の意識変化について」(『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第13号…二〇〇八年四月所収)

(さとう たつぜん・育英短期大学教授)